

『墨子』の押韻について

先秦諸子の文章において部分的にあるいは集中的に押韻していることは衆知の事實である。しかしどの部分が押韻しているのかとなると、論者間で必ずしも一致しているとは限らない。これは勿論、古代音に對する推定が異なることにもよるが、押韻についての考え方の相異にも由來する。即ち平聲は平聲、上聲は上聲、去聲は去聲、入聲は入聲と韻を踏むとし、四聲の間の別を嚴密に考慮する考えと、異なる四聲の間の通押もあり得るといふ考えとは、非常に大きな違いを生む。その違いは先秦諸子の文章表現の本質にも關わる問題といえる。今、『墨子』を手がかりに所見を述べてみたい。

親士篇に次のような文がある。

是故天地不昭昭、大水不濼濼、大火不燎燎、王德不堯堯者、乃千人之長也。

これについて、『墨子閒詁』には韻の指摘がない。江有誥の『先秦韵讀』は昭・濼・燎・堯を韻字とし、燎の下に「並平聲」と記し、四字を「宵部」とする。四字の四聲の相異を調整して全てを平聲として讀もうとするものである。江有誥は『詩經韵讀』で、周南采蘋の濼を上聲に、陳風月出と大雅旱麓の燎を去聲に讀んでおり、小雅鹿鳴の昭を平聲とするのに對して、大雅抑と魯頌泮水の昭を去聲に讀み換えてい

る。異なる四聲の間の押韻はあり得ないとする立場の江有誥であるから、四聲の讀み換えによる調整を圖らざるを得なかったのである。しかも『詩經』の場合には韻字としないわけにはいかない。その讀み換えは三字以上の韻字があれば少數を多數に従わせ、二字の韻字であれば平聲に従わせるのが一般で安易な印象を免れない。大正三年出版されたわが國の國語調査委員會編纂の『周代古音考韻徵』は四聲通押説に立つものだが、昭・堯を平聲、濼・燎を上聲とし、平・上の通押と考えている。

小取篇の初には次のような文がある。

夫辯者、將以明是非之分、審治亂之紀、明同異之處、察名實之理、處利害、決嫌疑、焉寧略萬物之然、論求羣言之比、以名舉實、以辭抒意、以說出故、以類取、以類予。

『墨子閒詁』は意の下で畢沅の説を引き「紀・理・疑・比・意爲韻、古四聲通」と記し、予の下でやはり畢沅の説を引き「故・取・予爲韻」と記す。『先秦韵讀』には韻の指摘がない。『周代古音考韻徵』は紀・理・疑を韻字とし、紀・理を上聲、疑を平聲とする。畢沅の説は『墨子校注』にあるものだが、古代における四聲通押を主張するものの如くである。ただ先にあげた親士篇の例では何も述べておらず、必

今鷹 眞

ずしも全文にわたって綿密に押韻を調べた結果の論ではなさそうである。しかも古音研究の專家のどの説もこの五字を同じ韻部とはしない。例えば江有誥に據った董同龢の『上古音韵表稿』では、紀・理を之上聲、疑を之部の平聲とするが、比は脂部、意は之部の入聲とする。之部と脂部の通押はまずないことからしても、五字全てを韻字と認めるのは無理があろう。その後に續く故・取・予も、故・予がそれぞれ魚部の去聲と上聲に屬するのに對し、取は侯部の上聲に屬する。従つて『周代古音考韻徴』は紀・理・疑のみを韻字とみなし、紀・理を上聲、疑を平聲として押韻を認めることとなる。

上にあげた二つの例は、古代の押韻に對する異つた二つの態度を典型的に示すものである。『詩經』の詩のように歌われた作品の場合には、歌の節廻しによつて四聲の相異を調整することができると思われる。漢魏の樂府に四聲を無視したような押韻が見られるのも、歌われたことに起因すると思われる。しかし諸子の文章の場合、四聲を讀み換えて發音したとすると、意味不鮮明となりかねない。戰國末の最初から文章として書かれたと考えられる『荀子』『韓非子』等の書物は別として、口舌による辯論を文字化したと考えられる『墨子』『孟子』等においては、四聲の讀み換えを安易に行つていたとは考えにくい。従つて表現技法の一つとして四聲通押の押韻がなされていたのではないかと、私は考える。そしてそれが戰國末の諸子にも影響を及ぼしていると思ふのである。そのような觀點に立つて、押韻していると思つた文を後にあげておく。

表は『先秦韵讀』『墨子問詁』『周代古音考韻徴』がそれぞれ韻としてあげたものである。その後、四聲通押を前提として、押韻しているかと判断した文を載せた。韻部は董同龢の『上古音韵表稿』に據る。

原文	韻讀	問詁	韻徴
<p>近臣則暗、遠臣則險、 怨結於民心、諂諛在側、 善讒障塞。(親士)</p>	<p>控靡爲韻、 挫平聲、 靡音摩、 歌部。 竭伐爲韻、 祭部。 灼暴爲韻、 入聲、宵部。</p>	<p>蘇時學云、 暗險心爲韻。 蘇云、側塞亦爲韻。 畢沅云、 控靡爲韻、 靡字靡聲。</p>	<p>暗險心爲韻、平聲。 側塞爲韻、 入聲。</p>
<p>今有五錐、此其銛、銛者必先挫、有五刀、此其錯、錯者必先靡。是以甘井近竭、招木近伐、靈龜近灼、神蛇近暴。(親士)</p>	<p>昭潦燎堯爲韻、潦燎並平聲、宵部。 宵部。 國稷爲韻、之部。 城傾爲韻、耕部。 當殃仰養爲韻、陽部。</p>	<p>畢云、國稷爲韻。 畢云、城傾爲韻。 畢云、當殃爲韻。</p>	<p>昭潦燎堯爲韻、昭潦燎上聲、 堯平聲、 國稷爲韻、 入聲。</p>
<p>是故天地不昭昭、大水不潦潦、大火不燎燎、王德不堯堯者、乃千人之長也。(親士)</p>	<p>昭潦燎堯爲韻、潦燎並平聲、宵部。 宵部。 國稷爲韻、之部。 城傾爲韻、耕部。 當殃仰養爲韻、陽部。</p>	<p>畢云、國稷爲韻。 畢云、城傾爲韻。 畢云、當殃爲韻。</p>	<p>昭潦燎堯爲韻、昭潦燎上聲、 堯平聲、 國稷爲韻、 入聲。</p>

則不可事、故食不可不務也、地不可不力也、用不可不節也。五穀盡收則五味盡御於主、不盡收則不盡御。(七患)

部。
食事爲韻、
食去聲、
之部。

畢云、仰
養爲韻。
畢云、食
事爲韻。
力、畢本
作立、云、
立節爲韻、
案畢本譌。
王念孫云、
畢說非也、
古音立在
緝部、節
在質部、
則立節非
韻、原本
立作力、
力在職部、
力節亦非
韻。

畢云、主
御爲韻、
王云、古
音主在厚
部、御在
御部、則
主御非韻。

仰養爲韻、
上聲。
食事爲韻、
去聲。

主御爲韻、
主上聲、
御去聲。

故備者國之重也、食者國之寶也、兵者國之爪也、城者所以自守也。(七患)
故古者堯舉舜於服澤之陽、授之政、天下平。
禹舉益於陰方之中、授之政、九州成。湯舉伊尹於庖廚之中、授之政、其謀得。文王舉閔天泰顛於置罔之中、授之政、西土服。(尙賢上)

平成爲韻、
耕部。
得服爲韻、
之部。

普下固爲
韻、固上
聲、魚部。
承廟爲韻、
蒸部。
光明常爲
韻、陽部。

畢云、寶
爪守爲韻。
蘇云、成
與平爲韻。
蘇云、服
與得爲韻。
俞樾云、
此文疑有
錯誤、當
云聖人之
德、昭於
天下、若
天之高、
若地之普、
若山之承、
不拆不崩、
若日之光、
若月之明、
與天地同
常。蓋首

爪守爲韻、
爪上聲、
守去聲。

普下固爲
韻、普下
上聲、固
去聲。

今萬城之國、虛數於千、不勝而入、廣衍數於萬、不勝而辟。(非攻中)

古者有語曰、君子不鏡於水而鏡於人、鏡於水、見面之容、鏡於人、則知吉與凶。(非攻中)

於武觀曰、啓乃淫溢康樂、野于飲食、將將銘、莫磬以力、湛濁于酒、渝食于野、萬舞翼翼、章聞于大、天用弗式。(非樂上)

秉轡授綬。(非儒下)

食力翼式、爲韻、之部。

四句下音、隔句爲韻、中二句承、崩、末三句光明常、皆每句協韻。

畢云、辟、關字之假音、入辟爲韻、容凶爲韻、東部。

俞云、刀字與食字爲韻、畢失其讀、故但知下文翼式是韻也。畢云、翼式爲韻。

轡綬爲韻、轡去聲、

夫辯者、將以明是非之分、審治亂之紀、明同異之處、察名實之理、處利害、決嫌疑。焉舉略萬物之然、論求羣言之比、以名舉實、以辭抒意、以說出故、以類取、以類予。(小取)

鼎成三足而方、不炊而自烹、不舉而自臧、不遷而自行、以祭於昆吾之處上鄉。(耕柱)

逢逢白雲、一南一北、一西一東、九鼎既成、遷於三國。(耕柱)

嘿則思、言則誨、動則事。(貴義)

方烹臧行、鄉爲韻、烹音滂、鄉同饗、陽部。

畢云、紀理疑比意爲韻、古四聲通。

畢云、故取予爲韻。

王引之云、雪與西爲韻、西、古讀若駝、駝征天之駝。北與國爲韻。畢云、北國爲韻。

綬平聲。紀理疑爲韻、紀上聲、理上聲、疑平聲。

方烹臧行爲韻、平聲。

思誨事爲韻、思平聲、誨事

姑亡、姑亡。古有丌術者、內不親民、外不約治、以少開衆。以弱輕強、身死國亡、爲天下笑。子元慎之、恐爲身誓。(備梯)
 敢問客衆而勇、煙資吾池、軍卒並進、雪梯既施、攻備已具、武士又多、爭上我城、爲之奈何。(備梯)
 以適廣陝爲度、環中藉幕、毋廣丌處。(備梯)
 審賞行罰、以靜爲故、從之以急、毋使生慮。(備梯)
 敢問適人強弱、遂以傳城、後上先斷、以爲涖程、斬城爲基、掘下爲室、前上下止、後射既疾、爲之奈何。(備蛾傳)
 相探相招呼相磨相踵

『墨子』の押韻について

去聲。強亡蓋爲韻、平聲。
 畢云、蓋同僵、亡強蓋爲韻。
 畢云、池施多何爲韻。
 畢云、度幕處爲韻。
 畢云、故慮爲韻。
 畢云、城程爲韻。
 畢云、室疾爲韻。
 度幕處爲韻、度去聲、幕處上聲。
 池施多何爲韻、平聲。
 磨靡爲韻、

相投相擊相靡。(號令) 火發自燔、燔曼延燔人、斷。(號令)
 客衆而勇、輕意見威、以駭主人。薪土俱上、以爲羊埕。積土爲高、以臨民、蒙櫓俱前、遂屬之城。(禪守)
 不至城、矢石無休、左右趣射、蘭爲柱後、望以固、厲吾銳卒、慎無使顧、守者重下、攻者輕去。養勇高奮、民心百倍、多執數少、卒乃下怠。(禪守)
 選厲銳卒、慎無使顧、審賞行罰、以靜爲故、從之以急、無使生慮、悲癩高憤、民心百倍、多執數賞、卒乃不怠。(禪守)
 使人各得其所長、天下

平聲。燔延斷爲韻、燔平聲、延斷去聲。
 輕人埕民城爲韻、眞耕通韻。
 休上聲、休後爲韻、幽侯合韻。
 固願去爲韻、魚部。
 倍殆爲韻、之部。
 願故慮爲韻、魚部。
 倍怠爲韻、怠徒以反之部。
 畢云、民城爲韻。詒讓案、埕亦合韻。
 畢云、休後爲韻。
 畢云、固願去爲韻。
 畢云、倍殆爲韻。
 王云、怠殆古字通。
 畢云、願故慮倍怠爲韻。
 畢云、長當爲韻、

休後爲韻、休平聲、後上聲。
 固願去爲韻、固去聲、願去上聲。
 倍殆爲韻、上聲。
 固願慮爲韻、願慮上聲、故去聲。
 倍怠爲韻、上聲。
 長當爲韻、

<p>事當、鈞其分職、天下 事得、皆其所喜、天下 事備、強弱有數、天下 事具矣。(禪守)</p>	<p>陽部。 職得喜備 爲韻、喜 去聲、之 部。 數具爲韻、 數所奏反、 侯部。 嘔滯殊珠 滯滯爲韻、 濡汝蘆反、 殊市蘆反、 侯部。 造巧爲韻、 造徂叟反、 幽部。</p>	<p>當爲韻。 畢云、職 得爲韻。 畢云、喜 備爲韻。 畢云、數 具爲韻。 見太平御 覽、而文 不似墨子、 或恐誤引 他書。 論讓案、 此淮南子 泰族訓文。</p>	<p>平聲。 喜備爲韻、 喜上聲、 備去聲。 數具爲韻、 平聲。</p>
--	---	--	--

是故比干之殪、其抗也、孟賁之殺、其勇也、西施之沈、其美也、吳起之裂、其事也。(親上)

この文は「靈龜近灼、神蛇近暴」に接續する。段落全體に押韻しており、抗と勇、美と事も韻字と考えられる。抗と勇は、『韵讀』において『老子』六十七章の勇・廣・長を韻字とし、「陽東通韵」とするのに従う。美と事は、脂部の上聲と之部の去聲と異なるが通押したと考える。

染於蒼則蒼、染於黃則黃。(所染)

江永は、蒼と黄をともに陽部唐韻の平聲とする。

此六君者所染不當、故國家殘亡。(所染)

嘗と亡。それぞれ陽部の去聲と平聲。

天之所欲則爲之、天所不欲則止。(法儀)

之と止。それぞれ之部の平聲と上聲。

故國離寇敵則傷、民見凶饑則亡。(七患)

傷と亡は陽部の平聲。

就陵阜而居、穴而處。(辭過)

居と處。それぞれ魚部の平聲と上聲。

故節於身、誨於民。(辭過)

身と民。ともに眞部の平聲。

凡此五者、聖人之所儉節也、小人之所淫佚也、儉節則昌、淫佚則亡。

(辭過)

節と佚は脂部の入聲。昌と亡は陽部の平聲。

是以入則不慈孝父母、出則不長弟鄉里、居處無節、出入無度、男女無別(尙賢中)

母と里。『韵讀』は老子第一章において、母を滿以反として始との押韻を認める。節と別。ともに之部の入聲。

曰人衆與處、於榮得譽、則是雖使得上之罰、未足以沮乎。(尙同中)

譽と沮は魚部の平聲、處は魚部の上聲。

聖人以治天下爲事者也、必知亂之所自起、焉能治之、不知亂之所自起、則不能治。(兼愛上)

起は之部の上聲、之・知は之部の平聲。

吾豈能爲吾友之身、若爲吾身、爲吾友之親、若爲吾親。(兼愛下)

身と親、ともに眞部平聲。

日月不時、寒暑雜至、五穀焦死。(非攻下)

日と時、寒暑雜至、五穀焦死。(非攻下)

至と死は、それぞれ脂部の去聲と上聲。

江水によれば、時・至・死はともに支部となる。時は平聲。

其大父死、負其大母而棄之。(節葬下)

死と棄は、それぞれ脂部の上聲と去聲。

正長之不強於聽治、賤人之不强於從事也。(明鬼下)

治と事は、それぞれ之部の平聲と去聲。

老與遲者耳目不聰明、股肱不畢強。(非樂上)

明と強は、ともに陽部平聲。

使丈夫爲之、廢丈夫耕稼樹藝之時、使婦人爲之、廢婦人紡績織紉之事。(非樂上)

之・時・事は、之と時が之部平聲、事が之部去聲。

與君子聽之、廢君子聽治、與賤人聽之、廢賤人之從事。(非樂上)

曰食飲不美、面目顔色不足視也。(非樂上)

美と視は、ともに脂部上聲。

譬若匠人之斲而不能、無排其繩。(貴義)

能と繩。ともに蒸部平聲。

譬猶跛以爲長、隱以爲廣。(公孟)

長と廣は、陽部の平聲と上聲。『韵讀』は『文子』上徳篇において、

廣を平聲とし長と押韻していることを指摘する。

吾願主君、之上者尊天事鬼、下者愛利百姓、厚爲皮幣、卑辭令。(魯問)

姓と令、ともに耕部去聲。

故大國之攻小國也、是交相賊也、過必反於國。(魯問)

國と賊、ともに之部入聲。

離署左右、共入他署、左右不捕、挾私書。(號令)

署・捕・書は、それぞれ魚部の去聲・去聲・平聲。

務色諛佞、淫蠱不靜、當路尼衆、舍事後就、踰時不寧、其罪射。號令
靜と寧は、それぞれ耕部の上聲と平聲。『韵讀』では、『禮記』月令
において、寧を去聲として靜と韻を合せる。又『管子』正篇におい
て、靜を平聲として聽・争と韻を合せる。

葆民、先舉城中官府民宅室署、大小調處、葆者或欲從兄弟知識者許
之。(禎守)

署・處・許は、それぞれ魚部の去聲・上聲・上聲。